

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月22日現在

機関番号：32717

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04512

研究課題名(和文)自己肯定感を促進する地域的ナラティブ形成に関する国際比較研究

研究課題名(英文)A Comparative Study of Regional Narrative Formation for supporting and assisting of Youth esteem after the disasters

研究代表者

長濱 博文(Nagahama, Hirofumi)

桐蔭横浜大学・法学部・准教授

研究者番号：00432831

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：この度の調査では、両国の防災教育や災害への取り組みに大きな隔たりがあり、共通項を見出すことに腐心した。しかし、その過程で共同して取り組もうとしている諸団体に出会えた。それらの団体と活動をともしながら、共通した防災意識を共有することの大切さとそれぞれの新たな価値認識を形成することが不可欠であると確認でき、両国において質問紙調査を実施することができた。質問紙調査に関しては、防災への意識の高さには類似点を見ることができたが、問題意識には国民性も反映されたように理解した。日本の防災の経験がフィリピンでも還元されるよう、今後英文の論文も発表するとともに、フィリピンの学会においても研究発表していく。

研究成果の学術的意義や社会的意義

災害後の自己肯定感の維持は災害の多い日本にとって困難な課題である。それは最も大切な家族や地域の人々、営々と続けてきた家業など心の拠り所であったものとの別れを意味する。そのような中で、自らの心根をプラスに維持し続けるには、災害を超える目的意識の形成が求められる。本研究ではナラティブ・アプローチからの分析を中心としたが、目的意識の形成は内在するナラティブ(物語、語り)を書き換える人間の生命力にあるのではないかと考えるようになった。それこそが真のナラティブの転換を可能にするのであろう。本研究の成果は質問紙比較調査の成果として発表していくが、研究課題は堅持し、調査研究を進めていく。

研究成果の概要(英文)：In the research, there were, I found, huge differences in disaster prevention education and disaster management efforts in Japan and the Philippines, but I also found their similar stance to the nature and natural disasters. It was quite fortunate to meet the various groups, NGOs and Regional disaster management groups, that I would like to work together more on the process. While sharing activities with those groups, it had been possible to confirm the importance of sharing a similar awareness on disaster prevention on each country and the formation of new value perceptions of each, and then, the questionnaire survey in both countries had done. Regarding the questionnaire survey, although I could see similar points in the height of awareness of disaster prevention, the problem awareness, I understood, also reflected each nationality. Presentations and writing papers will be continued especially in the Philippines, so that what I learn will reduce some natural disasters in the future.

研究分野：比較教育学

キーワード：自己肯定感 災害、紛争 ナラティブ・アプローチ 道徳教育 ライフスキル 国際比較 国際協力 社会参画

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の学術的背景と問題意識〔国内的要因〕

日本の学習指導要領における道徳教育の位置づけは、教科目間の「要」となることであった。加えて、道徳教育推進教師の研修なども開始され、各教科において道徳的指導が加味され、生徒が道徳性を獲得するための多様な教育機会が期待されている。さらにグローバル化の中でも地域社会と学校との協働が深化し、日本の伝統と文化をより発展的に継承していくために、道徳の教科化は不可避的な教育改革と考えられる。

東日本大震災下において、日本人の高い道徳心は世界からの称賛を得た。日本には今も伝統に根ざす誇るべき道徳心があり、ボランティアに励む青年層にも引き継がれている。一方で、グローバル経済を牽引する日本において、自他ともの生命を尊び、変化の激しい社会においても自己を見失わない自尊心と洞察力を獲得することは極めて困難な課題である。また、高度な都市化によって、日本は「無縁社会」となり、生死を忘れて「無痛文明」化しているとの識者の指摘もある(森岡正博)。地域の自然や伝統文化への畏敬の念に溢れた精神性に根ざす「生きる力」の育成、その延長上として自己肯定感を裏打ちする地域的な“ナラティブ”が形成されることにより、日本の道徳教育は新たな可能性を獲得できると考える。

本研究におけるナラティブ(「物語」の意)の概念は、児童・生徒の健全な精神的発達を助ける臨床心理学的ナラティブ・アプローチに基づく。医療を中心とした多様な臨床の現場においてナラティブ・アプローチが盛んに実践されている背景には、精神的な病理を診断するだけでなく、改善に導く実践的方法論として注目されているからである。人は生きていく上で起こった様々な出来事に「意味」を見出し、その意味を構成して自らに言い聞かせる「物語」を作り上げる。それは「当然こうなるだろう(こうあるべきだ)」との潜在的に形成された価値規範が作用した結果である。自己の「物語」と同様に、地域に対する認識にも類似した認識がなされていると考えられる。しかし、「物語」を構成する潜在的意識や価値規範を客観視できた時、人間の内面世界は大きく変容し、主体的に人生に関わり始める。臨床の症例と同様に、自らと地域の価値を客観視し、時に再構築する時、人生と地域社会を肯定的に認識できる道徳教育の真の目的を可能にする。

(2) 研究の学術的背景〔調査国(比較対象国)選定要因〕

上記の国内における学術的背景と問題意識から、比較対象国をフィリピンとする。第一の理由として、長い価値教育の取組みがある。1986年の民主化革命以後に価値教育を導入し、新しい国民の育成を目指すとともに、開発独裁によって歪曲された伝統的国民性を再興することにより、学校教育の再建を図ってきた。2002年度からは、価値教育を「要」として教科目間統合が推進され、2012年には、日本型の12年制への移行に伴い再び教科として、その重要性は増している。その成果として、キリスト教とイスラームの宗教間の対立を緩和させるだけでなく、両者に価値教育がフィリピン人に求められる国民性の一部として認識されるに至っている。第二に、不平等や貧困などの社会状況にも関わらず、国民が高い幸福感を示している点である(ex. 地球幸福度指数〔HPI〕)。様々な出来事を肯定的に捉えられる価値観は、フィリピンの伝統であると同時に、価値教育によって体系化されたと考えられる。第三に、価値教育における教育内容の日本の道徳教育との類似性である。ともにユネスコの価値理念に即し、自己理解、他者理解、自然や崇高なものとの関わり、集団や社会との関わりからの観点から教授内容が構成されている。伝統文化的価値(地域的価値)とユネスコの価値理念の観点からの具体的比較が可能である。

2. 研究の目的

本研究は、価値多元化する地域社会において、道徳教育を通して地域性に根ざした自己肯定感の育成を可能にする地域的ナラティブ形成に関して実証的比較研究することを目的とする。伝統ある価値教育(道徳)が再び教科となったフィリピン、同じく道徳が特別な教科となる日本とを比較対象国とする。教育内容と価値のコンテクストを分析し、その教授法、評価、教授される価値のコンテクストを比較分析し、地域的ナラティブの抽出を図る〔構造分析〕。そして、地域的ナラティブが果たしている機能について参与観察を中心に比較分析する〔機能分析〕。地域的ナラティブの形成過程を明確化することにより、個人と地域社会に連関した道徳教育の発展に貢献する。

3. 研究の方法

自然災害の被災地域、貧困地域、紛争経験地域の学校訪問による授業の参与観察を実施する。同時に、先生方へのインタビューを行う。また、日本とフィリピンの被災地において質問紙調査を実施し、被災を経験、あるいは間接的に経験した青少年の意識調査を実施し、比較考察を行う。この際、質問紙には道徳的価値についても触れ、日本の道徳教育、フィリピンの価値教育が災害等を乗り越える上で有効であるかどうかについて、上述の構造・機能分析、そして現地訪問や参与観察を踏まえて質問紙調査の分析を行う。加えて、日本とフィリピンの被災地と呼ばれる地域及びそれ以外の課題を抱える地域にさらに調査範囲を広げ、地域性(災害を経験した地域及び経験した地域において、人々の意識にどのような違いがみられるか)について、さらに現地訪問・学校訪問及び授業の参与観察等の調査分析を継続することにより考察を深める。

4. 研究成果

今回の科研調査を通して、これまでの途上国としてのフィリピン研究ではなく、被災地の日本との比較研究により、先進国、途上国の相違はあるが、フィリピンにおいて教授されている価値教育、日本において教授されている道德教育をより客観的に捉えることができるようになり、両者が学校教育という枠組みの中において教授される教育内容としては機能しているが、実社会に出て、地域的ナラティブの影響を受けながら、自己肯定感を促進する過程について、より多くの知見を得ることができた。日本においては、高い道德心（規律や規範意識）が社会から期待される一方で、その社会生活に根ざした道德心は、必ずしも自己肯定感、あるいは社会のために活躍しているという自己有意性のナラティブとしては機能していないように思われる。フィリピンにおいては、学校で学ぶ価値教育の時間は限られているが、主要な社会的価値に対する生徒の意識や信仰心、自己肯定感とまでは言わずとも自己有意性の高い価値感を与え、社会生活を楽しむ、あるいは肯定するナラティブの形成が成されている。しかし、自己と家族に対する価値認識は、社会の規範意識と十分に連動していない場合も多く、社会問題や所得格差と貧困の問題の改善にも障害を与えていると考えられる。日本の道德教育は社会にも根づいている一方で、社会的ナラティブは形成しても、その中で自己肯定感を育むナラティブと連動している訳ではない。フィリピンでは、自己と家庭、信仰心をつなぐ社会的ナラティブは形成されているが、社会に対して建設的に参画する社会的ナラティブの形成に十分に成功しているとは必ずしも言えない。質問紙調査からも類似した傾向を見出すことができるが、両者からも被災後も自己肯定感を支えるナラティブを形成する価値認識が見出されるかどうかについては、質問紙調査からは十分な結果を得ることができなかった。ただ、指摘できることは、両者の出発点である日本の道德教育、フィリピンの価値教育においても改善すべき点があると同時に、社会的価値認識に連動させる過程にも課題があることである。日本では「道德」の授業には成功しているが、自己肯定感を高める教育には課題がある。フィリピンでは「価値」の授業には成功しているが、社会的道德意識を高める教育には課題がある。それらの傾向は、学校教育の終了と同時に社会に根づき、社会的ナラティブとして無意識のうちに拡大していくことになる。社会的ナラティブを改善し、被災しても社会人となっても自己肯定感を修正、改善できる「道德」教育の在り方が求められているのであり、新たな「生きる力」の形成について考察することが今後の課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

長濱博文「ナラティブ・アプローチによる学校教育における環境教育の再検討 釜石市諸学校の防災教育からいのちの教育への取り組みを中心に」、『東アジア研究』第20号、東アジア学会、単著、査読あり、2016年9月、25-43頁。 <http://www.eastasia.jp/sub7.htm>

〔学会発表〕(計4件)

長濱博文「日本とフィリピンにおけるレジリエンスを高める価値教育の在り方」第70回九州教育学会研究大会（於：宮崎大学）2018年。

長濱博文「グローバル教育への提言～グローバルネスの多様な視点・多様な現実から～」視点2) アセアネスの視点から＜フィリピンの子どもたち＞(シンポジウム) 第26回日本グローバル教育学会全国研究大会（於：京都教育大学）2018年。

長濱博文“A way of Strengthening Negative Capabilities in terms of Holistic and Narrative Approach through the unity of Family- School- Local Regions,” The 6th International Conference of The Asia-Pacific Network for Holistic Education, 2018年。

長濱博文「生命の教育を推進する思想としての社会構成主義の可能性」第89回(平成29年度春季)日本道德教育学会年次大会（於：千葉大学）2017年。

6. 研究組織

(2)研究協力者

ロメロ・レネ(Prof emeritus. Rene Romero)

マリア・アスワン(Dr. Asuan E. Maria)

フェラー・ジェリック(Dr. Jerick C. Ferrer)

アブレンシア・アーサー(Dr. Arthur Abulencia)

ガランチョ・アーリン・グリセリア(Dr. Glicería Arlyn G. Garancho)

アグジャ・J・マリオ(Dr. Mario J. Aguja)

グロ・E・アニーシャ(Prof. Anisha E. Guro)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。